1 開館20周年記念行事「ひとはくアニバーサリー」を開催

2012年10月13日に開館20周年記念行事「ひとはくアニバーサリー」が、秋篠宮殿下の御臨席のもと、300余名の出席者をお迎えして賑々しく執り行われました。第1部の記念式典では、井戸敏三知事による挨拶の後、秋篠宮殿下よりおことばをいただきました。また、来賓代表の藤原昭一県議会議長、竹内英昭三田市長よりご祝辞をいただき、最後に岩槻邦男館長よりお礼の言葉が述べられました。第2部の記念シンポジウム「新たな博物館の役割と地域貢献～次世代の博物館活動を描く～」では、中瀬　勲副館長より「地域の担い手が活躍する舞台をつくる博物館」と題する話題提供が行われた後、パネリストとして近藤信司国立科学博物館長、安部義孝ふくしま海洋科学館館長、林　良博山階鳥類研究所／県森林動物研究センター所長をお迎えしてパネルディスカッションが開催されました。

また、当日の午前中、秋篠宮殿下には、当館2階「ひとはく多様性フロア～魅せる収蔵庫トライアル～」ならびに移動博物館車「ゆめはく」の御視察と、当館の連携校である県立御影高等学校環境科学部の生徒ならびに連携活動グループ「NPO法人人と自然の会」、「ラボーンズ」、「こどもひかりプロジェクト」の代表の方々と御交流をいただきました。

写真1 秋篠宮殿下のおことば

写真2 記念シンポジウムのようす

写真3 記念シンポジウムを御聴講される秋篠宮殿下

写真4 県立御影高等学校環境科学部の生徒との御交流のもよう

写真5 移動博物館車「ゆめはく」の御視察のもよう

2 フォーラム「ひとはくが公館にやってきた！　～地域とひとはく」開催

ひとはくでは10周年の際にキャラバン事業を開始して県内各地へ出かけ、以降、地域研究員や連携活動グループとの共同研究･実践､共生のひろばでの交流等を通じて地域とのネットワークを深めてきました。本年度、20周年を機に、今後のアウトリーチ事業や外部施設等との連携の発展に活用するため､展示品を内蔵したトラック移動博物館車｢ゆめはく」を導入しました。それを受けて、9月15日兵庫県公館において、その活用方法をテーマにフォーラムを開催し、ひとはくと地域のネットワークの将来像を描きました。議論をより具体的に展開するために、室内に「ゆめはく」内のモデル展示を示し、県公館の庭では、アウトリーチ事業の実践として子どもたちを対象とした体験型プログラムを実施しました。今年度から「キッズ推進室」「こどもひかりプロジェクト」など兵庫県内だけでなく東北の子どもたちも対象としたキャラバン事業にも積極的に取り組んでおり、ひとはくキッズ大使も館員とともにフォーラム参加者を出迎え、サポートしてくれました。

演示（公館東側の庭）

11:00～15:00　ひとはくが公館にやってきた！

①　むしむしたいけん　かや遊び

②　生き物を拡大して見てみよう

③　おゆまるでつくる化石のレプリカ

フォーラム（公館１階　大会議室）　テーマ「アウトリーチ事業と地域連携」

13:00～13:20

主催者　あいさつ　兵庫県教育委員会　大西　孝　教育長

13:20～14:30　ひとはく実感プログラム

①　ひとはくの将来　（企画調整室　赤澤主任研究員）

②　移動博物館車について　（地域展開推進室　石田主任研究員）

③　室内のキャラバン展示見学＆庭のプログラム体験）

14:30～16:30

基調報告

その１　アクアマリンふくしま　古川　健（命の教育課長）

その２　佐用マリア幼稚園　戸田みゆき（教諭）

パネルディスカッション

パネリスト

アクアマリンふくしま　　古川　健

佐用マリア幼稚園　　戸田みゆき

関西広域連合本部事務局長　中塚 則男

NPO地域再生研究センター主任研究員　井原 友建

教育委員会社会教育課長　石橋　晶

コーディネーター　　中瀬副館長

基調報告として、「アクアマリンふくしま」の 古川さんから、先進事例として 2003 年度に設置した移動水族館車アクアラバンの運用状況を報告していただき、続いて、佐用マリア幼稚園の戸田先生から、2009 年の集中豪雨後に受け入れていただいたキッズひとはくキャラバンについて子供たちの様子を報告していただきました。

その後のパネルディスカッションでは、「アウトリーチ事業と地域連携」をテーマに関西広域行政、中山間地域支援、教育行政といった様々な立場から議論を展開しました。次頁に、その議論や会場アンケートからでた「ゆめはく」に対する提案の一部をご紹介します。

ゆめはくの役割、内容、行き先、運用などの面で多様な提案をいただきました。「ひとはくにしかできないおもしろいこと」が求められると同時に、地域の資源を活用した展示、地域に刺激を与える展示が求められていることなどがわかりました。地域のみなさんや関係者と議論しながら、運用しながら、「ゆめはく」を活用していきたいと思います。

写真 1. キッズ大使　お出迎え

写真 2. 基調報告

写真 3. 基調報告

写真 4. パネルディスカッショ

写真 5. パネルディスカッショ

写真 6. 会場から

写真 7. ゆめはく公募入選作品

写真 8. ゆめはくモデル展示

写真 9. ゆめはくモデル展示

写真 10. むしむし体験かや遊

写真 11. 生物を拡大して見よ

写真 12. 化石レプリカづくり

フォーラムやアンケートでいただいた「ゆめはく」に関わる提案(一部抜粋)

（ゆめはくの役割）

- ひとはくアウトリーチ活動は、ひとはくの営業活動。
- 震災や原発事故を受けた地域ではリアルな自然を体験できなくなっている状況で移動博物館重要。地域としてのリアルさを提供しなくてはならない。
- 農山漁村地域は人口減少、高齢化、土地の荒廃、集落機能の脆弱化などの課題を抱えている。地元の人が意外に地域のことを知らない。今こそ、地域の資源資産を知らしめ、残していくことがひとはくの役割として大切。
- 関西広域連合立にするぐらいの発想で、移動博物館事業を共同でできるのではないか。
- 地域で自然体験をする活動をしている。ひとはくでないとできないことに特化してほしい。私たちは学校など地域とひとはくをつなぐ役割を担える。

（ゆめはくの中で…）

- 食べてみる体験、つくってみる体験が１番重要なのではないか。
- 生きたものを手にとる五感を通じた体感を提供することが有意義。
- 本物に出会うことが、こどもたちが育っていく基盤になっている。
- 視覚や聴覚を使わなくても実物を感じられる展示を。
- 県内各地域を巡回する際に、子供達に自分達の住んでいる地域に住んでいる生物を再認識させ、それを守っていく意識を持ってもらえるように、「ゆめはく」に各地域に応じた生物を展示して欲しい（ふるさと、ふるさとの環境を愛する心を育てたい)。
- 地産地消大切。釣り道具や猟銃と、キッチンをつんででかけたらどうか。
- キッチン機能をつけて、ケータリングサービスもあればみんな楽しめる。
- 舞台（ステージ）として活用し地域の伝統行事を披露できる場に。
- 関西広域連合が有する博物館、水族館、美術館などと連携し、単独施設では提供できないサービスをゆめはく号で展開。自然、歴史、文化、芸術・・・色々なお宝が詰まったゆめはくを見てみたい。

（ゆめはくに来てほしい）

- アクアラバンとゆめはくで東北３県を一緒に巡りたい。
- 是非、大阪にも来て欲しい。

（ゆめはくの運用を工夫）

- 「ゆめはく」に来てほしい！と思っている地域の人たちが、事前にイメージできるように、ＨＰ上などで、どんなものが持ってこれるのか、どんな人がやってきてくれるのか、費用などの情報を写真や動画で紹介してもらえると良い。
- 小学校や中学校、地域団体へおもむく際は、単発的なイベントではなく、そこで得た知識や体験手法を学校関係者や保護者に伝え、継続的に環境学習が引き継がれるような運用を。
- ゆめはくをレンタカーにできないか。
- 小規模集落への出張など地域振興、地域の PR という視点も取り入れた運用を。
- 各地のキャラバン号が大集合するイベントができたらおもしろい。とりあえず「アクアラバンとゆめはく号が２ショットする日！」を開催してはどうか。
- 地域間の交流に活用できないか。例えば、流域を上流、中流、河口とそれぞれ

3「新展示」と「移動博物館車」を活用し、21 年目もさらなる飛躍を

昨年度、ひとはくは開館20周年を迎えました．その節目の年に，ひとはく「はたち」の記念事業としした．

新展示：魅せる収蔵庫トライアル「ひとはく多様性フロア」オープン

ひとはくでは，本物に触れ、体験できる、当館でしかできない学びの場の整備を新館構想のなかで暖めてきました．開館２０周年を迎えた節目の年を契機に，そのアイデアを少しでも具体化しようとトライしたのが，本館2階に新たに開設した魅せる収蔵庫トライアル「ひとはく多様性フロア」です．ひとはくが20年かけて収集した資料を活用し、「収蔵庫」と「展示」，「学びの場」が融合した「魅せる収蔵庫」で，ひとはくが提唱する“演示”をより具体的に展開する試みの場となっています．昆虫や植物，鳥類，化石，鉱物，古写真などの実物標本や二次資料を壁面や陳列ケースにずらりと展示し，触ったり，観察したりして，標本・資料を調べるおもしろさを体験できるコーナーや，ひとはくの秘宝が特別に展示される小部屋，標本・資料を活用したオープンセミナー等を開催できるスペースもあります．限られた空間での試みですが，標本・資料から自然界に隠された多様性の物語を読み解くおもしろさを，展示だけでなく，セミナーやイベントなどを通じての演示で体験いただける場として活用し，ひとはくのさらなる飛躍につなげて行きます．

写真 1．ひとはく多様性フロア　オープン式典．

移動博物館車「ゆめはく」発進

実物の標本や資料が持っている迫力やおもしろさを地域の方々にも知っていただこうと，ひとはくが館外での展示やイベントに取り組むキャラバン事業をはじめたときからの夢であった「移動博物館車」を開館 20 周年という節目の年に発進させることができました．「ゆめはく」が移動博物館車の愛称です．この愛称も，ロゴやラッピングのデザインも開館２０周年記念事業のひとつとして公募によって決めたものです．「ゆめはく」はコンテナ付きのトラック（2t ロング）で、展示室やセミナー室などとして利用できるよう、荷台にはさまざまな加工が施されています．例えば、コンテナの左の側面は上下に大きく開く構造となっており，内部には昆虫標本箱を配架できるようにネットを取り付け，顕微鏡などを使って観察した画像を写し出すための大型モニターなども設置してあります．今後は「ゆめはく」をキャラバン事業などに大いに活用し、ひとはくの地域での博物館活動や連携活動の充実を図るとともに，ひとはくのことをもっと多くの方々に知っていただき，本館来館者やセミナー参加者の活性化につなげて行きます．

写真 2．移動博物館者「ゆめはく」．

4 博物館と地域の未来を拓く「ひとはく将来ビジョン」の策定

ひとはくは 20 周年を迎えた今年度、数多くの記念行事と並行しながら、これまでの歩みを振り返りこれからの展開を考えるために“博物館と地域の未来を拓く「ひとはく将来ビジョン」”を策定しました。

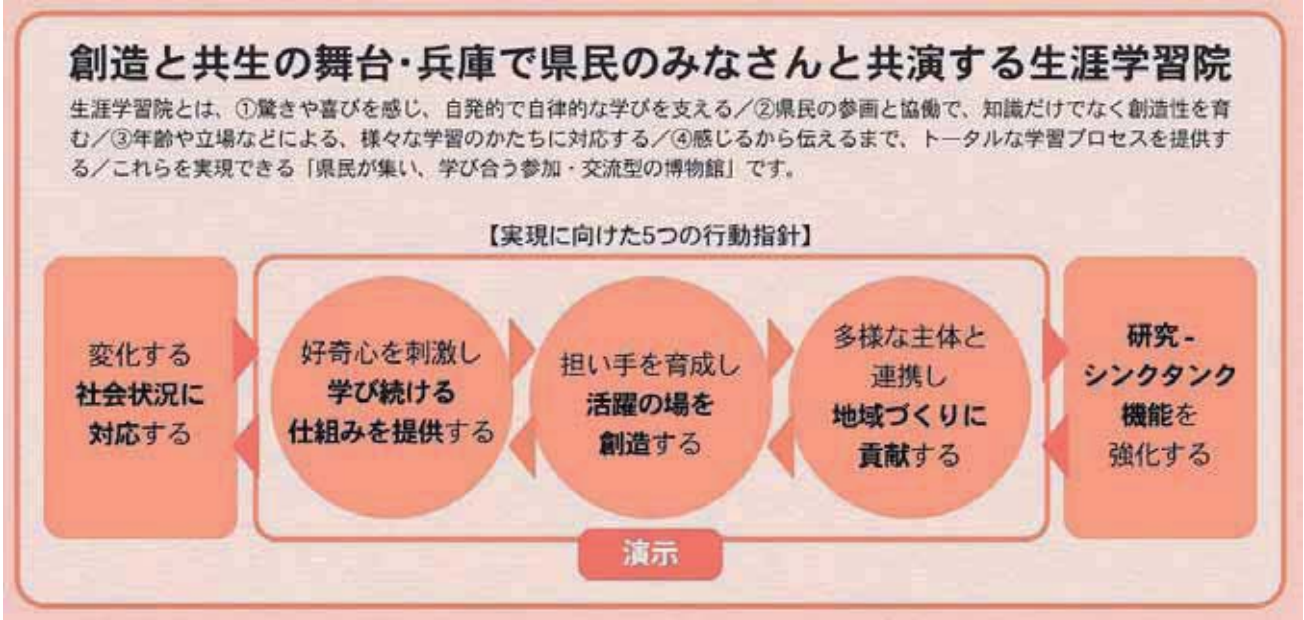

図 1.5 つの行動指針

これまで、ひとはくではいくつかの構想や計画をつくり、目標を定めながら活動を展開させてきました。開館 20 年の節目にあたり、変化する社会状況に対応しながら、いま実践すべき戦略を検討し、これからのひとはくが目指すものを示したものがこの「ひとはく将来ビジョン」です。ビジョンの作成にあたっては、多くの方々にご協力を頂きながら、プロセスそのものを共有しつつ内容を検討してきました。まず、20 周年の前年にあたる 2011 年度から「ひとはく将来検討勉強会」を開催し、多くの専門家の方々からご示唆を頂いてきました。さらに、20 周年記念事業の様々なイベントの中で、皆さまからひとはくの目指すべき姿についてのご意見を頂いてきました。

第１回
講師：中村順子 先生
（特定非営利活動法人コミュニティサポートセンター神戸 理事長）
山納 洋 先生
（大阪ガス株式会社近畿圏部副課長）
第２回
講師：牧 慎太郎 先生
（総務省自治行政局地域自立応援課長）
矢野 和彦 先生
（文化庁文化財部記念物課長）
第３回
講師：亀崎 直樹 先生
（神戸市立須磨海浜水族園 園長）
赤井 伸郎 先生
（大阪大学大学院国際公共政策研究科 教授）
第４回
講師：寺浦 薫 先生
（大阪府府民文化部都市魅力創造局文化課 主任研究員）
第５回
講 師：藤田 香 先生
（日経 BP 社 環境経営フォーラム 生物多様性プロデューサー）
鈴木 真由子 先生
（大阪教育大学教育学部 教授）

表 1.ひとはく将来勉強会の講師一覧

写真 1.ひとはく将来検討委員会の様子

また、2012 年 6 月 1 日には、ひとはく将来検討委員会および同専門委員会を設置し、3 回の本委員会および専門委員会や関係者へのヒアリング等を重ねながら、検討を重ねてきました。

このようなプロセスで策定されたこの将来ビジョンは、ひとはくの今後のあるべき姿を描くと同時に、日本の博物館の進むべき方向性も示唆するものであると考えています。

	氏　名	所属・職名
委員長	熊谷　信昭	兵庫県参与
委　員	林　良博	兵庫県森林動物研究センター所長
委　員	佐々木　正峰	独立行政法人国立科学博物館顧問
委　員	堂本　暁子	元千葉県知事
委　員	赤井　伸郎	大阪大学大学院国際公共政策研究科教授
委　員	角野　幸博	関西学院大学総合政策学部教授

	氏　名	所属・職名
専門委員	角野　幸博	関西学院大学総合政策学部　教授 （基本構想策定委員会委員・博物館協議会委員）
専門委員	山納　洋	大阪ガス㈱近畿圏部　副課長
専門委員	今井　裕子	香美町海の文化館（博物館協議会委員）
専門委員	甲賀　雅章	（株）シーアイセンター代表取締役・ソーシャルデザイン研究所代表

表 2.ひとはく将来検討委員会（左）および同専門委員会（右）の委員一覧

5 ひとはくの被災地支援

東日本大震災からの復興の２年目となった平成 24 年度は，ひとはく事業および他団体との連携事業として，被災地でのキャラバン事業を継続しました。昨年度から引き続いて児童館や博物館で体験プログラムを実施すると共に，住民の方々のご理解の元で仮設住宅や小学校にも活動を広げ，多くの子ども達に自然に触れる体験をしてもらえました。加えて，昨年度に立ち上がった「こども☆ひかりプロジェクト」との連携によって，全国の博物館が被災地に集まり，フェスティバル実施などを通して子ども達の学びを支援することができました。

写真 1. こども☆ひかりフェスティバルの様子.

写真 2. ひとはく Kids キャラバンの様子.

また，これまでに行ってきた阪神・淡路大震災からの復興の知見を整理することや，茨城県大洗町の復興プラン策定支援については，成果を被災地や広く社会に発信する年となりました。各種学会や一般書籍等を通じて成果を発信し，今後の復興に役立てるべく活動を継続しています。

実施月日	タイトル	実施場所
4 月 22 日	ひとはく Kids キャラバン in 会津若松	福島県立博物館
6 月 8 日	ひとはく Kids キャラバン in 東北	石巻市立貞山小学校
6 月 9 日	こども☆ひかりフェスティバル in せんだい	仙台市科学館
6 月 10 日	こども☆ひかりフェスティバル in ふくしま	福島市子どもの夢を育む施設こむこむ館
7 月 25 日		仙台市六郷児童館
7 月 26 日		仙台市七郷児童館
7 月 27 日	ひとはく Kids キャラバン in 東北	福島県楢葉町応急仮設住宅
3 月 9 日	ひとはく Kids キャラバン in 東北	人と自然の博物館
～	ひとはく Kids キャラバン in 東北	宮城県石巻市仮設開成第一団地
3 月 26 日	東北しぜんかわら版展	
3 月 27 日	ひとはく Kids キャラバン in 東北	福島県田村市船引運動場応急仮設住宅
	ひとはく Kids キャラバン in 東北	

6 Kids ひとはく大使 145 名が元気いっぱいに活動しました

2012 年度の 1 年間、ひとはくのキッズ関連の取り組みを広く PR し、キッズにとってよりよい博物館にするためのモニターとしての役割を果たしていただくために、2 歳から小学校三年生までの子どもたち 145 名に、kids ひとはく大使として活動していただきました。

任命式は 4 月 29 日に行われ、出席した大使には一人ずつ任命証が手渡されました。

大使の活動の一つが「Kids 館長」です。毎月（4 月、11 月、2 月は除く）第一日曜日の Kids サンデーの日に、毎回数名ずつのキッズ大使に館長室で記念写真の撮影、館内の巡回、お客様のお出迎えなどの体験をしていただきました。

ひとはくの開館 20 周年関連の行事でもひとはく Kids 大使が活躍しました。10 月 14 日に行われた「魅せる収蔵庫トライアル」と移動博物館車「ゆめはく」のテープカットです。

他に、目立たないけれど重要な役割が、ひとはくで開催されるさまざまなプログラムに参加したり、ひとはくの施設に対するご意見をお寄せいただくことです。

昨年度 1 年間のキッズ大使の活動のおかげで、ひとはくが小さな子どもたちとその保護者の皆さんにとってより良い存在になろうとしている事は PR できましたし、キッズ向けプログラムの開発や施設の改善に対しても多くのご意見をいただくことができました。これからも Kids ひとはく大使とは形を変えて、小さな子どもたちや保護者の皆さんとつながって行く仕組みをつくって行きたいと考えています。

3「ひょうご恐竜化石国際シンポジウム」を開催

写真 1. 国際シンポジウム「白亜紀前期の恐竜研究最前線」の総合討論典.

写真 2. サイエンスカフェ「篠山層群の化石から白亜紀の生き物を復元する」

写真 3. チータンの館内で恐竜竜骨格レプリカを解説するカークランド氏

写真 3. 恐竜化石を活かした地域づくりフォーラムのパネルディスカッション「これからの地域づくりを支えるもの　～恐竜と交流のバリュー」

2006 年に兵庫県丹波市で恐竜化石が発見されて以来、丹波・篠山両市に分布する篠山層群からは、保存良好な恐竜等脊椎動物化石が発掘されています。これら化石の学術的価値を国内外に向けて発信するために、2013 年 3 月 16 日、17 日の両日にわたり一連のイベントが行われましました。３月 16 日には人と自然の博物館において国際シンポジウム「白亜紀前期の恐竜研究最前線」を開催しました. 篠山層群発掘調査結果のまとめに続き, 海外 3 名（ジェームズ・カークランド、徐 星、ロマン・アミョ）, 国内 4 名（對比地孝亘、柴田正輝、山田敏弘、楠橋直）の演者による恐竜，古環境，植物，哺乳類化石の最新研究についての講演があり，さらに会場からの質問を交えた総合討論が行われました. 内容は専門的かつもりだくさんでしたが、350 名の参加者には恐竜化石研究の面白さの一端を味わっていただくことができました。

翌 17 日の午前中はサイエンスカフェ「篠山層群の化石から白亜紀の生き物を復元する」が丹波市山南町のやまなみホールにおいて行われました. 小田隆・徳川広和両氏による篠山層群脊椎動物の復元画・復元像の制作過程の紹介のあと，前日のシンポの 8 名の演者が作品に対してコメントしました. 136 名の参加者に，恐竜の復元にはアーチストと研究者の綿密な共同作業が必要であることが伝わったと思います. この催しの直後，隣接するチータンの館に全員移動し，前日シンポの演者に同館内の恐竜骨格（レプリカ）に関する解説をしてもらいました. 内外の研究者と恐竜ファンが密に接する良い機会でした. 17 日の午後は，恐竜化石を活かした地域づくりフォーラムが同じ敷地内の山南住民センターで行われました. 進士氏による基調講演に続き，パネルディスカッション「これからの地域づくりを支えるもの ～恐竜と交流のバリュー」（コーディネータ : 中瀬　勲, パネリスト : 村上　茂、荻野慎太郎、金野幸雄、浅倉陽子、東　朋子）が行われ，113 人の参加者がありました. これにより地域資源としての恐竜化石の価値が再認識されました。17 日の午後には，所　十三氏によるワークショップ「恐竜復元画を描こう」等のイベントも上記の催しと並行して行われました.

8 様々な機関と連携し、関西における生物多様性の普及活動を展開！

ひとはくでは 2011 年度より三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング(株)と NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークとの協働により「生物多様性協働フォーラム」事業を展開しています。本事業は、企業や自治体が生物多様性に取り組むメリットや必要性、その実践メニューや多様な主体の連携の先進事例を紹介し、関西における生物多様性の課題に取り組む企業や自治体の増加と、多様な主体によるネットワークの形成を促進しようとするものです。昨年度の 3 回のフォーラムに引き続き、2012 年度は自治体や活動団体との協働の輪をさらに広げ、徳島県では「『農・林・海』の場における生物多様性を維持・利活用し続けるためのしくみ」を、大阪府では「グリーンビジネスでつなげる『都市生活』と『生物多様性』」を、滋賀県では「共生のビジョンを広域的な視点から考える」をテーマにフォーラムを開催、のべ 725 名の聴講者を得ました。2 月には協働フォーラム・近畿環境パートナーシップオフィスとの共催により、近畿圏の地方自治体の生物多様性行政担当者を対象とした地域戦略策定促進研修会を開催しました。研修には 23 府県市町が参加、戦略策定済み自治体の担当者とこれから策定を進めようとする自治体担当者を交えたグループワークを行い、戦略策定のノウハウを共有するとともに、自治体間の情報交換を図りました。

このほか 2 月には環境省の主催の「生物多様性地域連携促進セミナー in 兵庫」に企画段階から参画し、「生物多様性地域連携促進法」の概要や行政や NPO 等の関係者が協働して生物多様性の課題解決に当たることの必要性についての解説や、兵庫県における多様な主体による連携の先進事例についての紹介を行いました。また、環境省生物多様性キャラクターのタヨちゃん・サトくん、ひとはく博士、はばタンと一緒に生物多様性について楽しく学ぶ子ども向けイベントも開催しました。

2013 年 3 月からは関西広域連合より要請を受けて、関西広域環境保全計画の推進に係る生物多様性検討チームに参画しています。

このように兵庫県内にとどまらず関西をはじめ広域での生物多様性の取り組みを今後も継続していく予定です。

写真 1. 生物多様性協働フォーラムの開催

写真 2.「生物多様性地域連携促進セミナー in 兵庫」では子どもも楽しく学べるイベントも開催

写真 3. 生物多様性地域戦略策定研修会でのグループワーク

９「教員のための博物館の日 in ひとはく」を開催

国立科学博物館が主催する「教員のための博物館の日」事業を 2012 年 8 月２１日（火）に当館にて開催いたしました。この事業は、おもに学校教員を対象として、まずは博物館の親しみを持っていただき、体験をともなった楽しみ方を知っていただくことを目的としています。国立科学博物館では、こうしたイベントを各地の博物館と共同開催されています。当館では、この事業をベースとして、これまで取り組んできた学校との連携や「夏期教職員セミナー」と時期をあわせて開催することでプログラムの充実をはかり、さらに関西圏における博物館や大学研究機関としてネットワークを活かして、17 機関による２１のプログラムを実施いたしました。実施内容は、午前に「博学連携」に関するフォーラムを、午後には博物館や企業、大学研究機関によるサイエンスワークショップを開催。フォーラムでは、学校現場の教員や博物館から様々な事例を話題提供し、当館の岩槻館長をはじめ博物館のスタッフ、現場教員を交えたパネルディスカッションを行いました。午後からのワークショップは、自然や生物だけに限らず、宇宙天文や燃料電池などの工学分野など、多岐に渡るプログラムとなりました。このワークショップの特徴は、教員だけを対象とした閉鎖的なものではなく、夏休み期間中の一般来館者にも開放するかたちで、実際に子ども達を対象として、どのようにプログラム展開されているのかを見て頂きました。教員側は、あくまで一参加者であったり、半分指導者としての役割を担って頂いたり、各地の博物館スタッフ等との交流など、多様な学びが実践できたようです。

この取り組みのもう一つの特徴は、「教員のため」だけでなく、博物館や大学スタッフに対する教育開発力の向上、いわゆるＳＤ（Staff Development）およびＦＤ（Faculty Development）を兼ねているものです。今回、多くの機関の方々がワークショップに参加くださったことで、他所がどのように教育プログラムを実施しているのかを相互見学することができました。アンケートの結果をみても、プログラム実施者からこの点を評価頂きました。単なる一方通行のイベントではなく、博物館スタッフ、教員そして来館のお客さんがそれぞれの立場で成長できるようなスキームを開発できた点でも大きな成果となりました。

10 伊丹市教育委員会との協力協定締結

兵庫県立人と自然の博物館（ひとはく）は、開館 20 年を機に、ひとはくの「学校教育支援」の一層の発展・充実を図るとともに「キャラバン事業」で培われた地域支援の経験を活かし、人口密集地域での事例として、平成 25 年 2 月 22 日、伊丹市教育委員会と協力協定を締結し、市教育員会との連携により社会教育と学校教育の充実を図り、生涯学習の振興に資するためのモデル事業に着手しました。

ひとはくは、公開博物館として学校団体等の観覧を受け入れ研究員による多様なセミナーを実施するのみならず、「高大連携推進事業」の一環として兵庫県立三田祥雲館高等学校他での授業実施や、兵庫県立大学附属中学校との３ケ年に渡る少人数による「課題研究」の指導、県下公立小学校で実施されているいわゆる「環境体験学習（環境体験事業）」への支援や、教職員を対象とした教職員・指導者セミナーを実施する等、総合的に学校教育活動を支援し続けております。

一方、ひとはくの持つ専門性やシンクタンク機能を活かし、県内各地への「キャラバン事業」の実施他、平成 21 年には「まちまるごとミュージアム事業」に協力するため、加東市と協力協定を結び、環境学習の振興を図るとともに、子どもたちの自然観察の機会等を提供する等地域支援に取り組んできました。

このような、開館から今日までのひとはくの学校教育支援、地域支援について体系化を図る試みとして、個々の学校支援ではなく教育委員会という組織を対象としあまり支援の事例がない社会基盤を備える都市部での事業に取り組むとの考えより、伊丹市教育委員会との連携が発案されました。

平成 24 年 11 月より実務担当者による会議を重ね、平成 25 年 1 月 25 日には「平成 24 年度第 1 回兵庫県立人と自然の博物館と伊丹市教育委員会の協力に係る推進委員会」が、当館中瀬勲副館長を委員長として伊丹市立労働福祉会館スワンホール（伊丹市昆陽池）で開催され、具体的な連携事業案が検討されました。これを受けて、平成 25 年 2 月 22 日、伊丹市立図書館「ことば蔵」（伊丹市宮ノ前）において、伊丹市教育委員会木下誠教育長と当館岩槻邦男館長の間で「兵庫県立人と自然の博物館と伊丹市教育委員会の協力に関する協定」が締結されました。

【協力協定により実施予定の事業】

小中学生の理科離れ対策事業への協力	「ｶﾞﾘﾚｵｸﾗﾌﾞ」（中学生）、「ｴｼﾞｿﾝｸﾗﾌﾞ」（小学生）への講師派遣他
中学校科学部への支援	講師派遣（ｱﾘの飼育、ｸﾞﾘｰﾝｶｰﾃﾝ）
教員研修への支援	理科実験講座（地学ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ）、教職員・指導者ｾﾐﾅｰ（外来種、岩石）の実施、中学校理科部会研究会への講師派遣他
移動博物館車「ゆめはく」の派遣	小学校自由研究作品展、中学校自由研究作品展（総合教育ｾﾝﾀｰ）他
来館及び広報活動の促進	小学校４年生転地学習、「自由研究ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ」の実施、共生のひろばへの参加、市立幼稚園学利用した参加者募集等の広報活動他

写真 1．推進委員会の様子（H25.2.5）

写真 2．協力協定調印式の様子（H25.2.22）

11　頌栄短期大学から 25 万点の植物標本を受け入れました

頌栄短期大学で長年維持されてきた植物標本をひとはくで受け入れることになりました。この標本は、主に同短大の教授であった福岡誠行氏と黒崎史平氏によって収集されてきたもので、兵庫県内のみならず、全国各地および外国産の標本を含め、総点数 25 万点にものぼる膨大な数のコレクションでしたが、黒崎教授の定年退職を機に、ひとはくの植物標本と合一することになりました。ひとはくの植物標本は、開館から 20 年間で約 13 万点になっていますが、今回の合一により一気に 38 万点ほどになります。

頌栄短大の標本は、維管束植物（シダ植物、裸子植物、被子植物）の押し葉標本で、約 25 万点の半数以上が兵庫県産です。その他に 4 割程度は国内他府県産、残りは外国産でおもに台湾やタイなど東アジアから東南アジア、さらにはネパール・ヒマラヤの植物も数多く含まれています。

頌栄標本は、福岡氏と黒崎氏および両氏とつながりのある国内外の植物分類学者によって研究され、最新の情報に基づいて種名が同定されています。また、多数の研究論文の証拠標本としても採用されています。

写真 1. モミジカラマツ（左），ケナシベニバナヤマシャクヤク（中），シマサルナシ（右）の標本．いずれも貴重種

ひとはくの研究紀要において兵庫県産維管束植物の目録（1999 年の初報から 2009 年の第 11 報まで分割）が出版されましたが、そのなかで県産植物約 2,600 種の産地情報が記録されました。このとき証拠標本として引用された約 6 万点のうち、6 割以上は頌栄標本からの引用です。兵庫県版レッドデータブックを作成する際にも、基礎となったデータの約 7 割は頌栄標本に基づいており、頌栄標本は重要な証拠標本としてだけでなく、同ブックの今後の改訂にもなくてはならないものです。

頌栄短大の植物標本には、一般市民から寄贈されたものも多数含まれていました。標本の引越しの際には、標本を寄贈されたみなさんが集まり、標本の箱詰め作業を手伝ってくださいました。膨大な作業量でしたが、みなさんの思いが込められた貴重な標本を、ひとはくが引き受けたわけです。あまりに膨大な量なので、ひとはくの収蔵庫にはすぐには入りきりません。しかし、ひとはくでは順次整理を進め、一日も早く、また元どおり使えるようにしていかなければなりません。

写真 2. 箱詰めされた植物標本

写真 3. 寄贈者らによる標本の箱詰め作業の様子

11 学術貢献にもとづく館員の受賞

当館に所属する 4 名の研究員が名誉ある賞を受賞された。4 名の功績を称え、以下に受賞者の氏名および受賞理由を記述する。

第 34 回北村賞
中瀬 勲　副館長

受賞理由：大阪府立大学から兵庫県教育委員会に転出後、兵庫県立人と自然の博物館の企画、開館を主導的に進め、全国的にも特徴ある博物館の運営に成果を挙げた。またその一方でこれまでの学術研究の成果を基盤に、兵庫県をはじめ各地での公園緑地の敷設や緑化計画等を指導し、さらにはパークマネージメントの確立や生物多様性ひょうご戦略の策定にも貢献した。さらに兵庫環境審議会等多くの委員会活動、政策策定等にも参画し、多大な成果と業績を上げている。また、淡路景観園芸学校の設立にも寄与し、造園分野発の専門職大学院に移行後は初代研究科長（校長）も務めた。

平成 24 年度兵庫県科学賞
服部 保　研究部長

受賞理由：照葉樹林の生態学的研究に取り組み、とりわけ日本各地における野外での入念な実地調査にもとづいて、樹木を中心とした森林の生物多様性の実態の解明を進めた。またその一方で、夏緑高木を育成し高林化することによる、画期的な里山再生手法を開発した。このように植生学の学術的発展と、それを基盤とした応用手法の開発にもとづく自然環境保全の推進に尽力し、多大な成果を上げた。

2012 年度日本植物分類学会奨励賞
布施 静香　主任研究員

受賞課題：「広義ユリ科を中心とした種生物学的研究」

受賞理由：単子葉植物の分類を中心に研究を進めてきており、優秀な学術的成果を上げてきている。とりわけ広義ユリ科植物については、高い解像度の分子系統樹を構築することで分類再編の基盤を構築し、ショウジョウバカマ属についても分類の整理や新種記載のほか、マイクロハビタットによる種の維持機構の存在について解明を進めた。また単子葉植物全体の分子系統樹の構築にも携わり、チシマゼキショウ科、キンコウカ科、タケシマラン属などについては種間の系統関係を明らかにした。また在野の研究者との共同研究や県フロラのとりまとめにも尽力し、さらに博物館所属研究員として幼児から高齢者までを対象にこれまで100回以上の講座を開催、植物に関する教育活動にも力を注いできた。いっぽう日本植物分類学会の活動においては、図書幹事や講演会担当委員を務め、会の発展に尽くしてきた。以上の業績が高く評価された。

第６回種生物学会片岡奨励賞

受賞理由：受賞者は植物を対象に分子系統解析を進め、多くの分類学的成果を上げている。とりわけその研究過程で、野外での生態観察と大量の植物さく葉標本に基づく解析をも丹念に続け、その上に分子系統解析の結果を重ねて議論している点は特筆に値する。布施氏の研究は以下の４つに大別できる。まず単子葉植物全体の分子系統樹構築に関する研究では、matK 遺伝子を用いることによって rbcL 遺伝子で見いだされていた植物分類群間の系統関係を更に詳細に解析した。また，当時混乱していたショウジョウバカマ属の分類を、形態と分子の両面から解析することで明瞭に整理した。キンコウカ科については、ノギランが同科で最初に分岐した植物群であり、多くの祖先形質を維持していることを示した。またその一方で植物さく葉標本の学術的価値を深く理解し、先の東日本大震災によって被災した植物標本の復元にも積極的に関与の上自ら行動し、その実践から得た被災植物標本復元方法をいち早く公表した。この標本復元法は世界でも類を見ない貴重な研究成果であり、社会的貢献を伴った重要な学術的活動といえる。なお種生物学会では、シンポジウムの講演・ポスター発表を積極的に行い活発な学会活動を展開し、また学会運営にも尽力してきている。

2013 年度* Ecological Research Award（日本生態学会英文誌掲載論文賞）
藤井 俊夫　主任研究員

受賞論文：Hirayama, D., T. Fujii, S. Nanami, A. Itoh, and T. Yamakura. Two-year cycles of synchronous acorn and leaf production in biennial-fruiting evergreen oaks of subgenus *Cyclobalanopsis* (*Quercus*, Fagaceae). Ecological Research 27 巻 6 号, 1059-1068 頁

賞の主旨：日本生態学会欧文誌「Ecological Research」の各巻（年６号）に掲載された論文の中から、特に優れた論文２編程度を選考し、それらの著者に贈呈。

＊ 2013 年 3 月 8 日受賞（日本生態学会での 2013 年度）

（※受賞者の職位は、受賞時点のもの）

13 「兵庫県立大学 20 周年記念シンポジウム」を開催

当館の職員の半数近くが兼務する兵庫県立大学自然・環境科学研究所も、今年で 20 周年を迎えました。これを記念して、2012 年 12 月 2 日（日）に公開シンポジウムを神戸市中央区のホテル北野プラザ六甲荘にて開催しました。当日は、約 200 名近くのかたにご参加いただきました。シンポジウムの目的は、当研究所がこれまでに行ってきた研究や地域貢献に関する成果紹介と今後の展望についての議論が目的です。まず、基調講演では、哲学者の内山節氏より、人と自然のつきあい方と科学の役割についてご講演いただきました。震災復興にまつわる自然との関わり方や古来からの自然観やローカルな共同体の意義などをまじえて、スライドなどは使わず、たっぷりと 1 時間近くのご講演を頂きました。このあと、当研究所の 5 つの系からこれまでの取り組み等についてプレゼンテーションを行いました。生物多様性や恐竜化石、コウノトリの野生復帰、景観園芸と緑環境、野生動物の問題、宇宙天文への理解といった地域資源の発掘や活用・マネジメントについて、大学の研究者が県の基幹プロジェクトとなる公共施設の職員を兼務する形式での活動実績について議論が取り交わされました。とくに論点になったのは、研究成果と社会をどのように繋ぐのか、といった点でした。一方通行の知識供与ではなく、地域ニーズとの折り合いをつけて行くと同時に地域との双方向性をもった研究をベースとした交流機会の重要性が各系に共通する課題であるとの議論が展開されました。参加者のアンケートにも、地域貢献への期待以上に、基盤となる研究成果への期待が大きく、研究内容をもっとしっかりと聞きたいと意見が多数を占めました。20 周年を機会に、研究の高度化とサイエンスコミュニケーションの充実を図ることが重要課題であると再認識できました。

平成 24 年度のタスクフォース事業報告

タスクフォース（組織群）について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入したものである。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成したものである。構成員は、リーダーおよびサブリーダー、その他であり、人員は、実情に応じて年度途中でも変更可能にしている。また、新たなタスクフォースを発足できるようにしている。平成 23 年度は 2 つのタスクフォース（恐竜・化石、マーケティング）が結成された。

■ 恐竜・化石　タスクフォース

(1) 新たな発掘調査地の策定

・平成24年7月に地質調査（のり面およびボーリング調査）を行った. その結果県立丹波並木道中央公園内には脊椎動物化石含有層が存在し、同公園駐車場近辺において地表近くに現れると推定された。また, 篠山層群分布域内で予定されている工事について関係者より情報提供を受け, 関係者に工期中の化石探索への協力要請をした。

(2) 篠山層群恐竜化石発掘調査検証委員会の実施

・同検証委員会を2回（平成 24 年 6 月 23 日および同年 8 月 27 日）開催。これまでの発掘調査・利活用に対する評価と今後の発掘調査・利活用に対する提言を「篠山層群恐竜化石等発掘調査　評価と提言報告書」にまとめ、そのPDFを博物館のホームページ上で公開した（平成 25 年 3 月 21 日）

(3) 国際シンポジウムの開催

・平成 25 年 3 月 16 日に恐竜化石国際シンポジウムをひとはくで、同月 17 日に、サイエンスカフェ、地域づくりフォーラムを丹波市山南町やまなみホールにおいて開催した。また平成24年11月に、丹波並木道中央公園で行われた関連イベントに対する支援も行った。

(4) まちづくり推進に係る恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

・たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会発行「たんば恐竜化石　おでかけ探検マップ」への協力・監修をした
・丹波市小学校理科教員にたいする「篠山層群の地質と化石」をテーマとした講座・野外実習を開催した
・篠山市教育委員会主催の小学校校外学習への協力をした
・並木道中央公園主催「丹波なみきみちまつり　2012」の展示協力・監修を行った
・丹波市ちーたんの館の企画展展示協力・監修、クリーニング指導、助言を行った
・篠山市太古の市民研究所、クリーニング運営への助言、資料提供を行った
・人材育成セミナーとして「丹波の恐竜化石ミニレクチャーと恐竜復元模型ワークショップ」「丹波の恐竜化石産地見学バスツアー」「竜と獣の道学・ダブルセミナー」および「竜と獣の道学・県外バスツアー」をたんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会および宝塚こどもみらい協議会と共催でおこなった

(5) 展示および演示コンテンツの充実

・恐竜復元アーチストとの協働を丹波市が企画している復元画・フィギア作成に監修者として参加する形で進めた。 竜脚類、ティラノサウルス類、デイノニコサウルス類、イグアノドン類、基盤的ネオケラトプス類、ササヤマミロス（真獣類）、カエル類および竜脚類の復元画とフィギアが完成した。

(6)三田の化石発掘体験広場の活用
・トライやるウィーク(平成 24 年 6 月)およびセミナー(平成 23 年 12 月)にて三田の化石発掘体験広場を活用した。

(7)研究成果や事業の新聞等への報道推進
・展示特別企画「丹波の恐竜化石発掘～6年間の軌跡～」について(平成 24 年 4 月 5 日)
・篠山層群恐竜化石発掘調査検証委員会の開催について(平成 24 年 6 月 7 日)
・竜脚類の下顎の化石の発見(篠山層群恐竜化石発掘調査検証委員会)について(平成 24 年 6 月 23 日)
・第2回篠山層群恐竜化石発掘調査検証委員会の開催及び県立丹波並木道中央公園における地質調査の結果について(平成 24 年 8 月 27 日)
・ひょうご恐竜化石国際シンポジウムの開催について(平成 24 年 12 月 6 日)
・兵庫恐竜化石国際シンポジウムの取材(平成 25 年 3 月 16 日)
・篠山層群から発見された化石の復元について(平成 25 年 3 月 17 日、丹波市山南支所)
・「篠山層群恐竜化石等発掘調査検証委員会」の評価と提言及び報告書について(平成 25 年 3 月 21 日、資料配布)
・篠山層群から発見されたほ乳類化石にかかる論文発表について(平成 25 年 3 月 27 日)

(8)化石クリーニング作業、および調査研究の推進
・篠山市宮田産の哺乳類化石(ササヤマミロス・カワイイ)の記載論文を公表した(平成25年3月27日)
以上のように、今年度の重点事業をほぼ当初の計画どおりに実行した。また、そのことにより次年度以降の活動にもつながる成果を得ることができた。

■マーケティングタスクフォース
(1)ひとはく事業実施に関わる県民ならびに企業との連携
・広告協賛企業数は 44 団体に上ったが、これは昨年度実績よりも11団体の減少となった.
・20 周年記念事業説明パンフレットの編集・発行ならびに, 記念事業を実施するために必要な資金を寄付金として募集する事業を支援した.

(2) 外部資金を活用したひとはく手帖の出版
・44 団体から広告協賛金を獲得することができたが, これは金額ベースで昨年度より 25 万以上の減額となった. ひとはく手帖の発行を「ひとはくセミナー実行委員会」ならびに「ひとはく 20 周年記念事業実行委員会」による協同発行とすることで, 例年と同じ頁数のひとはく手帖を出版できるだけの資金を調達できた. 次年度以降は, さらなる協賛先の開拓が重要な課題である.

(3)20 周年記念事業実行委員会事務局運営
・同委員会事務局会議の運営を支援し, 各種事業が円滑に実施されるよう調整を行った.

(4)コラボレーション組織の検討
・人と自然の博物館と協同する新組織設立に向けて検討ならびに資料作成を行った.

平成 24 年度事業報告

人と自然の博物館では，その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために，平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている．中期目標は，いわば博物館の行動の指針となる大項目であり，これが全部で 9 項目設けられており，それぞれに達成を目指すべき目標値（指標）が設定されている．そして，この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている．措置では，中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について，その行動の方針と，具体的な数値目標が設定されている．

次ページ以降の図表および解説は，中期目標の各項目に即して，平成 24 年度の博物館の活動内容とその自己評価，および平成 25 年度の事業方針を整理したものである．また，中期目標を支える措置の項目については，それぞれについての目標値・実績・達成度（%）を示した．

なお，平成 19 年度に中期目標と指標，および措置について，平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて，さらに社会のニーズへの対応を考慮して修正を行った．平成 24 年度は，平成 22-23 年度の実績や達成状況，博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し，それに従って事業を進めた．